

Title	琉球開闢神話とその聖地
Sub Title	Ryukyuan creation myth and its holy places
Author	那波, 克哉(Naba, Katsuya)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2015
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.109, No.1 (2015. 12) ,p.53- 77
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	藤原茂樹教授 松村友視教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01090001-0053">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01090001-0053</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 琉球開闢神話とその聖地

那波  
克哉

## 一 はじめに

池田彌三郎は「海神山神論の計劃<sup>(1)</sup>」の中で、「四 神の出現」について、次のような項目を立ててている。

20 海辺により来る神と山上に到り着く神と、それは整然とはしていない。その例証として、いわゆる天孫降臨の伝承を検討してみる必要がある。

21 天孫降臨に関する神話伝承の検討。来臨する神の故地とこの国土における出現の場所。海上より来たる来臨の方式と、山上に到り着く方式との混淆。かささの岬とくしふるたけと。

24 かもなびに関する歌の一群が、『万葉集』卷十三に記録されていること。琉球における、きこえおほきみの「あがりううまい」と称する聖地巡行との比較検討。

池田氏は、神の出現方法や場所の検討である20、21に統けて、沖縄における聖地と山の神との関わりの検討を24として挙げている。

この24に見える聞得大君の「東御廻い」とは、琉球王府の最高神女である聞得大君が、祖先神の上陸と農耕の始まりに関わる聖地を巡礼・祭祀することである。後に聞得大君だけではなく、一般士族にまで広がった行事だが、廻る聖地については一様ではない。『島尻郡誌<sup>(2)</sup>』は「地方により、各氏族によつて其の拝所が各々異なる。」と説明し、その一例として、「玉城城趾・受水走水・ミントン・やはらぢかさ・玉城・大井・仲村渠樋川・齋場御嶽・知念大井・知名御井・テダ御井・西原祝女殿内・チチン御井・伊保潮井・与那原親井」の十五か所を挙げているが、聞得大君がどの聖地を巡ったのかは、残念ながら判然としない。

一方、聞得大君が回る場所で明確になつてゐる聖地は一七一三年に編集された『琉球国由来記<sup>(3)</sup>』「卷一 王城之公事」に、二月に麦の祭礼の為に「久高嶋」へ、四月に稻の祭礼の為に「知念及玉城」へ行幸することが記されている。王族が久高島や知念・玉城を特に「東御廻い」に関わる聖地として挙げているのは琉球開闢神話<sup>(2)</sup>の舞台でもあるからだろう。琉球国最初の正史である『中山世鑑』によると、

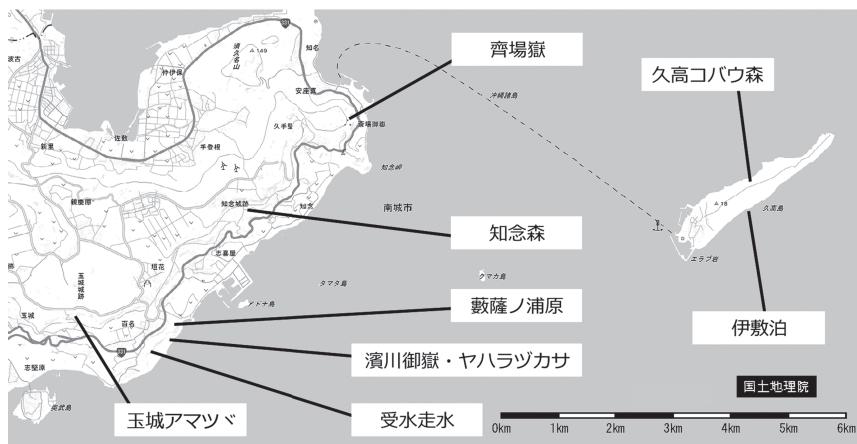
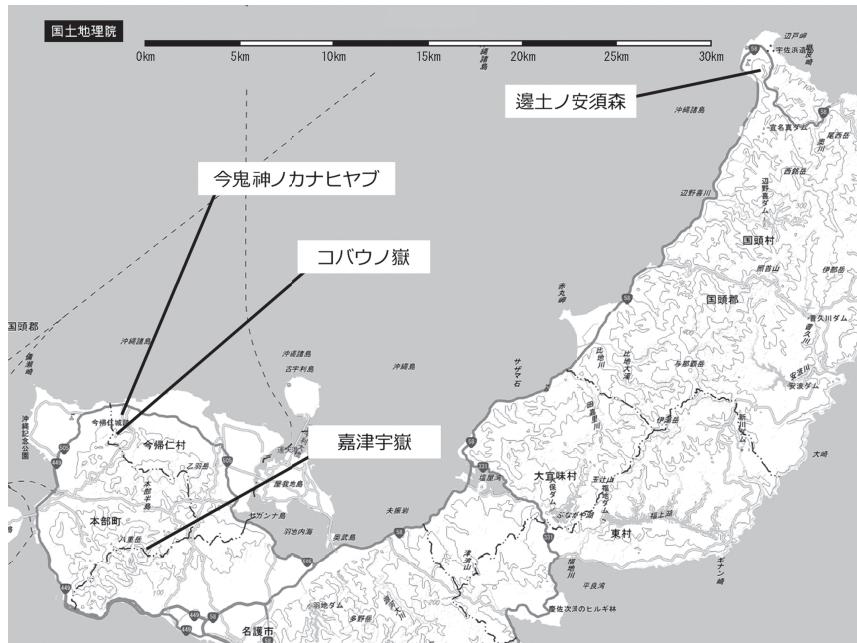
曩昔、天城ニ、阿摩美久ト云神、御坐シケリ。天帝是ヲ召レ、宣ケルハ、此下ニ、神ノ可レ住靈處有リ。去レドモ、未ダ島ト不レ成事コゾ、クヤシケレ。爾降リテ、島ヲ可レ作トゾ、下知シ給ケル。

阿摩美久畏リ、降リテ見ルニ、靈地トハ見ヘケレドモ、東海ノ浪ハ、西海ニ打越シ、西海ノ浪ハ、東海ニ打越シテ、未ダ嶋トゾ不レ成ケリ。

去程ニ、阿摩美久、天ヘ上リ、土石草木ヲ給ハレバ、嶋ヲ作リテ奉ントゾ、奏シケル、天帝、睿感有テ、土石草木ヲ給リテケレバ、阿摩美久、土石草木ヲ持下リ、嶋ノ數ヲバ作リテケリ。

先ヅ一番ニ、國頭ニ、邊土ノ安須森、次ニ今鬼神ノ、カナヒヤブ、次ニ知念森、齊場嶽、藪薩ノ浦原、次ニ玉城アマツヅ、次ニ久高コバウ森、次ニ首里森、眞玉森、次ニ嶋々國々ノ、嶽々森森ヲバ、作リテケリ。  
數萬歳ヲ經ヌレドモ、人モ無レバ、神ノ威モ、如何デカ可レ顯ナレバ、阿摩美久、又、天ヘ上リ、人種子ヲゾ、乞給ケル。

開闢神話に関わる聖地 北部と南東部（地理院地図より作製）



天帝、宣ケルハ、爾ガ知タル如ク、天中ニ神多シト云ヘドモ、可レ下神無シ。サレバトテ、黙止スベキニ非ズトテ、天帝ノ御子、男女ヲゾ、下給。

と記され、本島の嶽々森森の内に、阿摩美久によつて九つの重要な御嶽（聖地・拝所）が作られたとされている。この内「東御廻い」に関わる拝所は先に『琉球国由来記』「王城之公事」で見た聞得大君の「久高コバウ森」「知念森」「玉城アマツヂ」の他、「齊場嶽」「敷隆ノ浦原」である。開闢神話に出てくる九の聖地のうち五つが王府である首里より東、「東御廻い」に関わる土地であることは重要な情報であると考える。この五つの聖地こそが池田氏が24の項目を構想した聖地にあつるのであろう。

また、『中山世鑑』「卷一 琉球開闢之事」の続きには、

ヲボツカグラノ神ト申スハ、天神也。

ギライカナイノ神ト申スハ、海神也。

とあり、天と海との二つの対応する神が紹介されていて、天から降る神と海から寄り来る神とが並んでおり、沖縄の神話の中にも、先に見た池田氏の20、21との関わりを感じることができる。本稿は池田氏の視点を引き継ぎつつ、琉球における聖地とそれに関わる奄美など他地域の聖地について検討し、神来臨の方向性とその視線の在り様を考えるものとする。

## 二 「東御廻い」にも「開闢神話」にも見える聖地

知念森

知念森のある知念城は、沖縄県南城市の高台にある。この城内に拝所・御嶽があり、『琉球国由来記』「卷十三 知念間切」に、

城内友利之嶽 知念村

神名、知念森添森ノ御イベ

と見え、知念間切の最初の聖地として出てくる。「齊場嶽」よりも「久高コバウ森」よりも先に出てくるところにこの御嶽の重要性が見えると考えられる。さらに「城内友利之嶽」の祈願内容を見ると、

#### 知念巫、御崇之意趣者、

首里天加那志美御前、何年御スデ始リメシヨワチヤル、何性ノ、何ノ御歳、ノフ事モ、百ガホウノアルヤニ、御守メシヨワチヘ、御タボヘメシヨワレ。又御恩子御スデモノ、御爲、左リ右リ、百ガホウノアルヤニ、御守メシヨワチヘ、又島國ノ、毛作リ・キヅクリノタメ、百ガホウノアルヤニ、御守メシヨワチヘ、アブシマクラ、石實金實アルヤニ、御守メシヨワチヘ、唐・大和・宮古・八重山ノ舡々、上リ下リ、オハツキヤヘト、百ガホウノアルヤニ、御守メシヨワチヘ、那霸ノ湊ニ、御引付メシヨワチヘ、御タボヘメシヨワレ。デ、

とある。首里の王やその御子に百果報があるように祈る言葉から始まり、国土の完成の祈り、豊作や富の祈り、そして海路の安全を祈願する内容で終わる。航海安全の祈願も重要な要素に入っていることが分かる。国家として発展していくために小さな島国である琉球にとって交易は生命線だからである。開闢神話にも見え、東御廻いに関係する聖地はどれも海に近い。この知念城も海岸部から五百メートルほどしか離れていない、にもかかわらず、標高は百メートルほどもあり、地図で見るだけよりも海岸から急に高くなっていく印象のある聖地である。城内から見渡すと南城市的海が展望でき、十八世紀には城内に間切番所が設けられていたということも、納得できる。そのような場所が古くから航海安全を祈願する場所であったというのはごく自然なことであると考える。

#### 久高島・久高コバウ森

本島南東部、安座真港からフェリーで二十分程度、港から六キロメートルの距離に久高島がある。琉球王府からも最高の聖地と位置付けられた島で、十二年に一度行われてきた神女就任儀礼であるイザイホーの行われていた島としても名高い。この島の中でも特に重要な聖地として久高島フボー（クボー）御嶽が大切に守られている。「久高コバウ森」のことであつたというのはごく自然なことであると考える。

ある。前掲の『琉球国由来記』久高島行幸の記事には、阿摩美久が天へ上り、五穀の種子を天帝に乞い、初めて麦・粟・菽・黍を久高島に蒔いた、とあり、また、五穀の壺が東の伊敷泊に流れ寄ったとも伝えている。いずれにせよ五穀の種子が最初に根付いた島として描かれている。久高島には高所らしい高所はないが、久高コバウ森のすぐ西側の海岸部は崖地となつており海から目立つ位置ではある。また久高コバウ森について『琉球国由来記』「卷十三 知念間切」には、

コバウノ森 四御前 同嶋

一御前、コバヅカサ

一御前、ワカツカサ

一御前、スデヅカサ

一御前、ヤクロ河

此コバウ森、阿摩美久、作り給フト也。詳ニ、中山世鑑ニ見タリ。

右伊敷泊・コバウ森、六御前へ、隔年ニ一次、二月、麥ノミシキヨマノ時、當職御使之時、仙香一結完、御五水三合

完、御花米九合完、本下布一端完、今焼マカリ二完、供<sup>レ</sup>之。久高巫・外間巫、御崇也。

御崇之意趣、同<sub>二于友利嶽</sub>也。

とあり、高山ではないながらも祈願の内容が知念城友利嶽と同じであることが記されている。そこにはやはり海との関わりも見えてくるのである。

### 齊場嶽

久高島へ渡る安座真港のすぐ南側、海岸部より百メートルほど上ったところに齊場嶽（齋場御嶽）がある。琉球王府の定めた本島最高の拝所とも言うべき場所で、王府の最高神女である聞得大君の就任儀式である「お新下り」が行われる場所でもある。しかしこの齊場嶽は独立した聖地と考えるより久高島との関係で考えるべき場所であろう。なぜなら、齊場嶽内に

は久高島の白砂が撒いてあり、また、久高島を遙拝するサングーライと呼ばれる拝所もあるからである。さらに、久高島の記述に戻るが、『琉球国由来記』「卷十三 知念間切」には、

伊敷泊 二御前 久高嶋

(東方へ御拜被レ遊也)

一御前、ギライ大主

一御前、カナイ眞司

とあって、島の東海岸にある伊敷泊にニライカナイの神名が見える。沖縄本島の東に浮かぶ久高島のさらに先に王府がニライカナイを見ていることは確実であろう。海の向こうの世界であるニライカナイから五穀の壺が流れ寄るような東の聖地久高島と、それを拝む聖地としての齊場嶽との関係を見るべきであると考える。ここには齊場嶽—久高島—ニライカナイという信仰の横方向の視線を見ることができる。これは、先に見た『中山世鑑』における開闢神話の天と地との対応である縦方向の信仰の視線との比較で興味深い。

### 敷薩ノ浦原

先に見た知念森からさらに二キロメートルほど南西には敷薩ノ浦原と呼ばれる聖地がある。ここも海岸部に近く、標高十五メートル程の高台である。『琉球国由来記』「卷十三 玉城間切」には、百名村の項目に、

ヤブサツノ嶽 二御前 同村

一御前、神名、タマガイコマガイノ御イベ

一御前、神名、ムメギヨラタチナリノ御イベ

此敷薩、阿摩美久、作り給フトナリ。詳ニ、中山世鑑ニ見タリ。

右三御前、公朝御祈願、御祝物、雨粒天次ニ同。

とある。雨粒天次とは次に挙げる玉城城内の拝所であり、開闢神話における「玉城アマツバ」のことであろう。その雨粒天次での祈願については『琉球国由来記』「卷十三 玉城間切」に、

玉城巫ニテ御崇之意趣者、知念間切知念村、城内友利之嶽ニ同。

とあり、「敷薩ノ浦原」も「玉城アマツバ」も祈願内容は先述の知念森のものに集約されているのである。さらにこの高台の南側の海岸には、アマミキヨが上陸したとされるヤハラヅカサや、そこでアマミキヨが稻作を始めたとされる受水走水うきじゆはいじゆと呼ばれる聖地も存在する。これらは、『島尻郡誌』で見た「東御廻い」の拝所である。『琉球国由来記』「卷十三 玉城間切」に、

濱川 百名村

神名、ヤハラヅカサ潮バナツカサノ御イベ

濱川ウケミヅハリ水 同村

神名、ホリスマスミカキ君ガ御水御イベ

右二ヶ所、公朝御祈願、御祝物、雨粒天次ニ同。

とあり、ここでの祈願内容も玉城アマツバ・知念森と同様であることが記されている。

玉城アマツバ

敷薩ノ浦原より一・五キロメートルほど西に玉城城がある。『琉球国由来記』「卷十三 玉城間切」には、

雨粒天次 玉城村

神名、アガル御イベツレル御イベ

此嶽者、城内ニアリ。阿摩美久、作り給フトナリ。詳ニ中山世鑑ニ見タリ。

とある。ここは築城の年代が定かではなく、『島尻郡誌』には「アマミキユが築いた城であるとの伝説があつて、城主は

アマミキユの子孫即ち天孫子であつたと伝ふ。」とある。周囲より明らかに標高が高く一八〇メートル近くあるので、久高島も含めた本島南東部の展望は素晴らしいものがある。嶽名からは天へのつながりを連想させるが、ここでの祈願の内容も先述の通り知念友利嶽に同じであり、国王とその血筋の隆盛や五穀豊穣だけではなく、航海の安全が祈願されているのである。

ここまで検討で、開闢神話に登場する九の聖地のうち「東御廻い」とも関わる五つの聖地は、どこも海岸部近くに存在し、航海安全が祈願され、山とは言ひがたくとも海に間近の岩場など目立つ存在であることが確認された。

また、アマミキヨ上陸地との伝説のあるヤハラヅカサ・濱川御嶽も砂浜に大きく巨岩がせり出しており、石灰質の岩肌は陽光に白く輝いて如何にも航海上の良い目標となり得るものである。展望が良く、航海安全を祈願する聖地となるほどの場所は、逆に古くから海を行く人々が沖合から目立つ目標として確認していた場所でもあると考える。隆起珊瑚の島である沖縄には海岸部の沖合五百メートル前後を取り巻くイノーとよばれるリーフがある。それより内側が主な生活圏であり、波の穏やかなリーフ内は良い漁場で、イノーより外は波の荒い危険な世界である。現代でも地元の人々が海岸部で注目するのはリーフの切れ目であるクチと呼ばれる場所で、そこが入港の目印となる。クチを見つけるには陸地に目標が必要となる。イノーの外から中に入り、目標物であるムラのシンボルの下に戻った時の安心感がこれら聖地の信仰の源となつたのだろう。琉球国内を統一した王府はイノーの内側に籠つてゐるわけにはいかず、奄美や八重山、遠くは中国へ船を送り国家としての存在を示さなければならなかつた。だからこそより沖合から目立つ聖地というものに焦点を当て、それらを取り込んで国家としての祭祀の場所に指定したのであろう。このような視点から、さらに開闢神話に見られる、他地域にある四つの聖地についても検討してみたい。

### 三 「開闢神話」に見られるその他の聖地

#### 邊土ノ安須森

開闢神話の最初に出てくるのが「邊土ノ安須森」である。ここは沖縄本島最北端にある標高二四八メートルの岩山で「辺戸御嶽」とも言われている。『琉球国由来記』「卷十五 國頭間切 辺戸村」には、

アフリ嶽 同村

神名、カンナカナノ御イバ

昔、君眞物出現之時、今歸仁間切、アフリノハナニ、冷傘立時、コバウノ嶽ニ冷傘立、又アフリ嶽ニ立ト、申傳也。

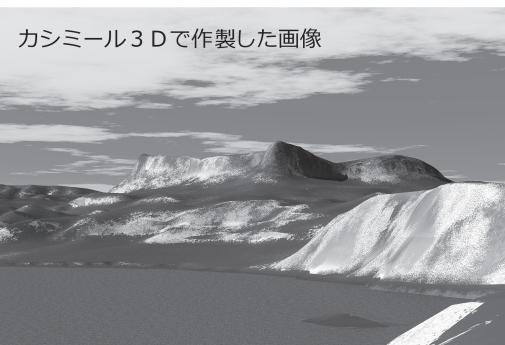
と見える。神の出現の予兆として、冷傘が御嶽の山全体を覆うように出現するというので、その出現する山が辺戸御嶽だというのである。「冷傘」とは『琉球国由来記』「卷二 財器門」に「涼傘（俗云ニアフリ）」「當國涼傘、尚巴志王世代、從「中華制」來用之也。」とあり、後の項目にある「雨傘」とは違い、王に関わる傘であることがわかる。「君眞物」とは『中山世鑑』「卷一 琉球開闢之事」に、「守護ノ神モ現ジ給。キミマモントゾ、稱シ奉ル。」とあるので、何らかの守護の神であることは疑いがない。そしてやはりアフリ嶽が國家レベルでの祭祀に関わっていたことは確実である。この辺戸には他にもシチヤラ嶽と宜野久瀬嶽が『琉球国由来記』「卷十五 國頭間切」中に見えるが、これら三つの御嶽の祈願の内容については宜野久瀬嶽の項目に記録されている。

首里天加那志美御前、百ガホウノ御爲、御子、御スデモノ、御爲、又島國之作物ノ爲、唐・大和、島々浦々之、船往還、百ガホウノアルヤニ、御守メシヨワレ。デ、御崇仕也。

やはりここも国王とその血筋や作物の実りの為の祈願だけでなく、航海安全の祈りが捧げられていることがわかる。

辺戸の安須森は辺戸岬から望むと急峻な岩場の目立つ大変特徴的な山である。ここで辺戸岬から見た「辺戸御嶽」の写真とカシミール3Dで作成した画像を掲げるが、これらを見ると、安須森が「東御廻い」に関係する各聖地よりもさらに海上

からその特徴的な山容がはつきりと認められる場所であることが分かる。



### 今鬼神ノカナヒヤブ

これは現在の今帰仁村にある今帰仁城内の拝所である。『琉球国由来記』「卷十五 今歸仁間切

城内上之嶽 今歸仁村

神名、テンツギノカナヒヤブノ御イベ

此嶽、阿摩美久、作り玉フトナリ。詳ニ、中山世鑑ニ見ヘタリ。

とある。

ところで、一八七五年にまとめられた『聞得大君御殿並御城御規式之御次<sup>(6)</sup>』では、開闢神話に關わる御嶽として、「國頭間切あおひ之御嶽、今帰仁之こはおの御嶽、首里森之御嶽、さやはの御嶽、弁之御嶽、久高こばおの御嶽、玉城雨辻」とある。『中山世鑑』とは少し異なる七つの聖地に絞られており、今帰仁の聖地は、「こはおの御嶽」とされている。この違いは、なぜうまれたのだろうか。「今帰仁こはおの御嶽」とは『琉球国由来記』「卷十五 今歸仁問切 今歸仁村」にも見える聖地で、

コバウノ嶽 同村

神名、ワカツカサノ御イベ

謝名村ニ、アフリノハナト、云所アリ。昔、君眞物出現之時、此所ニ、黃冷傘立時ハ、コバウノ嶽ニ、赤冷傘立、又コバウノ嶽ニ、黃冷傘立時ハ、此所ニ、赤冷傘立ト、申傳也。

とある。辺戸のアフリ嶽とよく似た話が記されているが、ここでは今帰仁村に近い謝名村のアフリノハナとの対応で話が展開しているところが、特に土地に根差した話として無理なく通じてくる。辺戸のアフリ嶽で見た記述ではどこのコバウノ嶽との対応が不明瞭だからである。

このように考えたとき、もともとの今帰仁村の聖地はコバウノ嶽であつたが、そのうちに北山の拠点として今帰仁城が重要になり、三山統一後に琉球王府の聖地として今帰仁城内の城内上之嶽（カナヒヤブ）に國家守護の機能が移るにあたつて、同じく国家守護の聖地の役割を担つた辺戸御嶽にも君眞物の伝説がつながつて行つたと考えることもできよう。実は、今帰仁城内上之嶽周辺に上がつてみると、そのすぐ背後に二上の形状の鞍部を持つ山が間近に迫つて今帰仁城を見下ろしてゐるが、この山がコバウノ嶽なのである。「グスク」の発生や機能が所謂「城」とは性格が違うとしても、今帰仁城の防備という点では明らかに不利で、ムラレベルの中のもともとの聖地がまずコバウノ嶽であり、そこに見守られるように今帰仁城が発展していったとみることができる。今帰仁村の海岸部、今泊の海岸線からも今帰仁城よりはその背後のコバウノ嶽が特徴的な山容として目立つてゐる。土地の人々の聖なる山としての視線はまずコバウノ嶽にあつたのであろう。そ

してこの聖地も『琉球国由来記』に見られる祈願の内容に「唐・大和・宮古・八重山、島々浦浦ノ、船々往還」の守りが入つてゐるのである。

しかしながら、三山統一後の今帰仁村における祭祀の在り方は、必ずしも安定しなかつた。三十三君の一人として首里王府から派遣された神女である阿応理屋惠の職は廃止されたり復活したりしており、北山監守と阿応理屋惠が首里に引き上げてしまつてからの祭祀は今帰仁ノロが肩代わりしていたという指摘もある<sup>〔7〕</sup>。この事と、開闢神話の聖地が『中山世鑑』（一六五〇年）、「琉球国由来記」（一七一三年）では今帰仁城内の「カナヒヤブ」であるにも関わらず、「聞得大君御殿並御城御規式之御次第」（一八七五年）では、今帰仁城背後の「コバウノ嶽」とされたことは、無関係ではあるまい。つまり、時代が下るにつれて、祭祀所の重要度がムラレベルの聖地であり、海からも目印になりやすい今帰仁のコバウノ嶽に戻つていつたとみることができるのである。

### 首里森・真玉森

『中山世鑑』に記された開闢神話九つの聖地のうち首里に存在する「首里森」「真玉森」については王府が一番近くの聖地として設定したのである。『琉球国由来記』「卷五 御城中御日御月火神御嶽之事」には、  
キヤウノ内ノ前ノ御ミヤ首里ノ御イベ

此首里森、阿摩美久、作り玉フトナリ。詳ニ中山世鑑ニ見ヘタリ。

### 眞玉城ノ御嶽

神名、玉ノミヤノ御イベ

此眞玉森、阿摩美久、作り玉フトナリ。詳ニ中山世鑑ニ見ヘタリ。

とあり、土地に根差して発展してきたと考えられる他の聖地よりは記述が乏しいのである。首里城内もしくは首里中の挙

所としての機能を持つていたと考えられ、ムラレベルの他の拝所とは区別すべきである。

ここまで、『中山世鑑』の開闢神話に見られた聖地を、主に『琉球国由来記』の記述から確認してきた。国家レベルの聖地として選定された場所は、ほぼどこも海岸沿いの目立つ岩場・岩山であり、海上から人々の視線をそこに集めるには十分に特徴的であった。では、海からの視線がどのように文学に現れたのか、次に考えてみたい。

#### 四 『おもろさうし』と航海

『おもろさうし』は尚豊王の即位三年、一六二三年に全二十二巻、総数一五五四首で完成した歌集である。琉球王府による編集とはいえ、各地のウタから土地の信仰の様子をうかがうことはできるだろう。『おもろさうし<sup>(8)</sup>』「第十三 八一八」に、

一 安須杜の

切り口の

君の歛へ

清ら手折り富

又 何れのふた

何れのまきよ 降れ欲しや

又 意地気まきよ

意地氣ふた 降れ欲しや

とある。これは辺戸御嶽へ神が「手折り富」という船で降りる歌である。「第十七 一一九一」には、

一 辺戸の安須杜に 押せや

辺戸の切り口に 押せや

押せや やちよく

又 今日の良かる日に

今日のきや／＼る日に

とあって、辺戸に神が降りるときに目ざすのは「切り口」であるということがわかる。外間守善はこの「切り口」とは、断崖の意であつて、辺戸御嶽の別名でもあるとしている。<sup>(9)</sup> このような山が、海上を移動する際に重要な目印となることはすぐくに想像できることであつて、それは次の例、「第十五五四」からも窺える、

一 聞へ押笠

鳴響む押笠

やうら 押ちへ 使い

又 喜界の浮島

喜界の盛い島

又 浮島にから

辺留笠利かち

又 辺留笠利から

中瀬戸内かち

又 中瀬戸内から

金の島かち

又 金の島から

せりよさにかち

又 せりよさにから

かいふたにかち

又 かいふたにから  
安須杜にから  
又 安須杜にから  
赤丸にから  
又 赤丸にから  
崎ぎや杜から  
又 崎ぎや杜から  
金比屋武にから  
又 金比屋武にから  
崎枝から  
又 崎枝から  
親泊にから  
又 親泊から  
首里杜にから

岩山である辺戸御嶽が、航海上の目標となつてゐるのである。神女が北の奄美大島から船で那覇まで行く時のものである。まず、奄美の喜界島からはじまり、奄美大島笠利（辺留笠利）→奄美大島瀬戸内の海峡（中瀬戸内）→徳之島（金の島）→沖永良部島（せりよさ）→与論島（かいふた）→辺戸御嶽（安須杜）→桃原の赤丸岬（赤丸）→古宇利島（崎ぎや）→今帰仁（金比屋武）→残波岬（崎枝）→那覇（親泊）と目標をつけながら移動していく。北から船で沖縄を目指す時、本島の最初の目標となるのがこの辺戸御嶽なのである。「第十三 九二三」には、

一 辺戸に おわる ましらて

ましらでは 崇べて

吾 守て

此渡 渡しよわれ

又 奥に おわる ましらて

ましらでは 崇べて

とある。「奥」というのは辺戸の南東にある村で、辺戸にいらっしゃる神女（ましらて）が祈る神によつて無事に航海をさせて欲しいという意であろう。辺戸御嶽の神に海上守護の役割を期待していることが確認できる。前に見たような八一八番歌・一一九一番歌・九二二番歌などのような、神が辺戸御嶽に降るという観念、辺戸御嶽に守られて海を渡るという観念が生まれてくる要因として、五五四番歌に見られるように、航海上の良い目標になること、沖合いからもすぐにそれとわかるような特異な形をしているということが大きいのであろうと考える。ちなみに、この辺戸御嶽周辺は御嶽を囲むように遺跡が存在する。宇佐浜遺跡・宇佐浜B貝塚（国頭村辺戸）・カヤウチバンタ遺跡・辺戸石山遺跡（国頭村字宜名真石山原）などである。貝塚を含むこれら遺跡の存在が、古くから辺戸安須森の麓のいたるところで生活をしていた海の民がいたことを証明する。大きな山のない南島においては、遠目にもはつきりそれとわかる形状をした、巨岩に近い山というものが聖山となることが考えられるのである。他の御嶽になるが、『おもろさうし』中に、御嶽を海上からの目標にしたことがわかるものがある。「第十三 九三四」に、

一 国の撫でしが

撫でしが 船遣れ

和々と

和やけて 走りやせ

又 国の御宣り子が



御宣り子が 船遣れ

又 神や おなり神

ころは いしゑけり

又 嘉津宇嶽 取たもの

蒲葵嶽 取たもの

とあり、嘉津宇嶽や蒲葵嶽を目当てにしているのだから海が静かであるはずだと詠う。蒲葵嶽とは多くの地域にある名称であるが嘉津宇嶽が本部半島の山であることを考えれば蒲葵嶽は今帰仁のコバウノ嶽と考えてよいだろう。辺戸から那覇へ向かい、南下していくときは本部半島の中でも高山である嘉津宇岳（四五二メートル）が、本部半島を周るときはコバウノ嶽が良く目立つからである。まさに航海の実体験がウタに結びついているとも言えるのではないか。本部半島で一番の高山というと八重岳（四五三メートル）であるが、山塊の端に位置し、山頂近くが尖つた、目標にし易い山は嘉津宇岳なのである。嘉津宇岳を見つけ、本部半島の先のコバウノ嶽を回ればまた首里に近づいていけるのである。

## 五 海に寄り添う信仰

ここまで、沖縄の御嶽について見てきた。御嶽の中には一番聖なる神域として、拝所の裏の禁足地にあたる部分にアカギやクバなどの神木が存在する。やはり本土の神社の神木と同様に天上から神が降つてくる観念がそれに表れていると見ることができよう。しかし、久高島の五穀の壺に関わる伝承などから分かるように、沖縄には天上世界の観念の他に、海の彼方の世界というのもまた大きく信仰されている。折口信夫は「琉球の宗教」<sup>(10)</sup>において、

琉球の神道の根本の觀念は、遥拝と言ふところにある。至上人の居る樂土を遥拝する思想が、人に移り香炉に移つて、今も行はれて居る。

御嶽拝所は其出発点に於て、やはり遥拝の思想から出でる事が考へられる。海岸或は、島の村々では、其村から離れた海上の小島をば、神の居る処として遥拝する。最有名なのは、島尻に於ける久高島、国頭に於ける今帰仁のおとほしの最古いものであらうと考へる。此類は、数へきれない程ある。私は此形が、おとほしの最古いものであるが、此類は、数へきれない程ある。私は此形が、おとほしの最古いものであらうと考へる。としている。国頭の今帰仁が遥拝所であるのは、第二尚氏の出た伊是名島を望むことができるためであり、島尻の斎場御嶽は、久高島とを望むことができるためである。また、「東御廻い」とは首里から東の聖地を廻ることであり、太陽の昇る方向というだけでなく、王府から斎場御嶽を遥拝すること、その先の久高島を遥拝すること、またその先のニライカナイを遥拝することが、王府にとつても大事な信仰であつたと考えられる。これは人々が海の彼方のニライカナイを想像する横方向の視線である。

また、先の折口の言う「海上の小島」やその周辺は、葬送地であることも多い。特に海岸沿いの崖地は風葬の地とされることが多く、その場所は拝みの対象となり、聖地となつてているのである。例えば、恩納村の屋嘉田には小島が多いが、その中に、『琉球国由来記』「卷十五 恩納間切 恩納村」に「ヤウノ嶽」として見えるヤウノ島がある。

ヤウノ嶽 三御前 恩納村

壹御前、神名、ツミタテノイペナヌシ

壹御前、神名、オロシワノイペナヌシ

壹御前、神名、アフヒギノイペナヌシ

『恩納村誌<sup>(1)</sup>』によれば、「六月二十五日 ヤウ島拝。」「なお、このヤウ島拝



には谷茶から魚が捧げられた。意味は未明であるが、おそらくヤウ島近くを往来して、寄地の谷茶野原を渡航耕作していることに対するものか、あるいはその島付近で海の幸を得ていることからか、あるいはその両方についての感謝ではなかろうかと思う。」とある。『琉球国由来記』による神名からその性格までは検討しかねるが、海の幸を捧げる対象であることは窺える。そしてこのヤウノ嶽の周辺、恩納中学校の北側などの海岸は現在も墓地であり、聖地である「海上の小島」と葬送地とが近く存在している。他地域の各ムラを見ていても、海岸沿いに墓地が点在している例は多くあり、聖地である小島と祖先が眠る場所とは正反対のものではなく、同じ空間に共存しているのである。ヤウノ島そのものが葬送地であるかは未確認ではあるが、聖地そのものが葬送の場所であつたり、聖地の周辺に葬送の地があつたりすることが、沖縄においては特に多い。仲松弥秀は『神と村』<sup>〔12〕</sup>において、本島周辺に存在する「奥武」という地名の島は葬送と関わっているという指摘をしている。人々は「あの世」や「神の世界であるニライカナイ」を海岸から海の向こうにイメージしているのである。

また、海岸部よりすぐ沖の岩を特別の名称で呼ぶこともある。下野敏見は「トカラ列島の民族文化」<sup>〔13〕</sup>において、

沖縄県にタチガミのような瀬がないかというとそうではなく、沖縄ではそういう瀬をトン系呼称で呼ぶ。たとえば座間見島のトノバル、久米島のトノバラ、恩納村のチトンカ、外トンカ、辺野古のトンセなどがある。この呼称は、奄美にもつづいて、奄美大島北端の笠利崎の北東に浮かぶトンバラ岩、同町喜瀬のトン崎、瀬戸内町や宇検村枝手久島のトグラ崎、徳之島の北端、金見崎の北々東に浮かぶトンバラ岩などがある。

と指摘している。例えば恩納村の前兼久トンゲワ・仲泊トンゲワなどもそうで、仲松弥秀は前出の『恩納村誌』で、前兼久トンゲワも仲泊トンゲワも以前は浜からこれらを遥拝していたということを指摘している。



これとは逆の視線、つまり海の彼方から我々のムラへ神が辿り着くという方向を見てみたい。前出の下野敏見による「タチガミ」の信仰である。奄美大島の例になるが、高山の少ない南島において、海の彼方から神がやってきて上陸しようとした場合に、その足がかりとなる岩が存在すると考えたようで、それは立神と呼ばれて信仰されている。この立神は鹿児島県を中心に多く存在する。奄美大島の大和村にも立神があつて、そこでは、旧二月に神を迎えるオムケ、旧四月に神を送るオーホリという独特な祭りがある。今里地区では、まずノロが一年間の安全を祈るなど、屋内での神事を済ませた後、浜に行つて、立神の前でも神事を行なうのだが、「オムケ・オーホリ」（瀬尾満・杉浦一雄）には、

今里では、まず、オムケで迎えオーホリで送る神、つまり、祭るべき対象となる神について、テルコ神がオムケにはニシ風に乗つて島に来て、オーホリにはハエ風に乗つて帰つて行くと伝える。祭りの前日にテルコ神が来て、立神にイカリを下ろす音が聞こえたといい、当日は神が来るから恐しい日とされ、神のヨといつて神が見えたともいう。また、オムケにはニシ風に乗つて神が内地から立神に寄つて那覇に行き、オーホリにはハエ風に乗つて神が那覇から立神に寄つて内地に帰るとも伝える。

とあり、海上から神が来臨する際に、神が足がかりとするのが海中に立つ岩であることがわかる。さらに、

ところが、オムケ・オーホリの時には、このように海からだけでなく、山からも神が降りて来るという。山の神は、今里の西方に高くそびえるクビリ山から馬に乗つて降りて来て、最初にウンヤドネに行き、次々に各家をまわるといふ。また、祭りの時、神人たちが浜で立神とクビヤナとを結ぶ線上に座すのは、クビヤナを降りて来る山の神と立神とが話し合いをするためともいう。クビヤナは今里と宇検村との境の地で、ムントゴ（現在は水が流れていな）の水源地である。つまり、海から来る神と、その神を迎るために降りて来る山の神とがあるということになる。

と続く。クビヤナというのはクビリ山の尾根が南の方で最もくびれた所で、海上から立神を通して陸地を見た人々の視線がこのような祭礼に結びついていると考えられる。ヤマアテとは海中の立神だけではなく、任意の三点の見え方から海上で

の自位置を把握するものであるから、この例のように背後の山の位置も大切になつてくる。この立神の信仰というものが、漁民もしくは航海者の知識・技能が信仰に結びついた例と言え、海上から陸地を見るという横方向の視線も信仰の源となつてゐると考えられるのである。

#### 鹿児島以北

海中にある「立神」はすべて陸地のすぐ傍の小島である。山との対象で興味深いのが、鹿児島県枕崎市の南の崎に「山立神」とあり、その先の海中に「立神」とあることである。また『枕崎市史<sup>(15)</sup>』には「立神と岩戸山」という伝説が採録されている。

ある日立神と岩戸山が喧嘩をしたことがある。立神が腹立ちまぎれに岩戸山に火（火箸・火鉢ともいう）を投げつけたところ、これが岩戸山の先端にあたつて火事を起し、燃えて赤く爛れて崩れ、今の赤崩・禿山ができ、岩戸山はそのまま返報に鉋丁（鉈ともいう）を立神に投げつけた。立神はそのため、身体を切りとられて沖に聳え立っている。それ以来、この二つはたがいににらみ合つたまま向いあつてゐるのである。その時、隣にいたのが硫黄島である。この三つはもともといい友達であった。ところがこの喧嘩を見ていた硫黄島はたいそう怒つて、喧嘩をしないように注意すると、立神はさつそく硫黄島めがけて槽を投げつけたので、硫黄島は怒つてむくむくと煙を出しているのである。

岩戸山とは枕崎市東部にある標高二四四メートルの小山であり、硫黄島は立神から五十キロメートル弱離れた島である。海に面わる集団の視線が山—立神—島とに注目していたことが窺える話であると考える。

また、天孫降臨の舞台とされる「笠狹之崎」を現在の鹿児島県川辺郡笠沙町や野間岬に比定する説があるが、まさしくそこにも「立神」が存在する（野間池と呼ばれる湾の裏側の浜）。枕崎市の立神ともいくらも距離のない地点である。また、出雲世界においても、少名毘古那神が「天之羅摩船」に乗つて大国主神のいる「出雲之御大之御前」に辿り着いている。<sup>(17)</sup>これが島根半島の美保であるとすれば、そこには冲ノ御前・地ノ御前と呼ばれる海中の岩があり、現在も美保神社の境内とさ

れる鳥居からこれらを望むことができ、神事としてはそこから美保神社の祭神である事代主（言代主）をお迎えするといふ。そこには、明らかに海上から沖ノ御前と呼ばれる岩を経由して神がやつてくるという観念があるのである。また、地元の漁師はこの沖ノ御前・地ノ御前の周囲の波の様子を見て天候を判断したという。このようなことも信仰の源となっていくのである。また、海中の小島だけではなく、海岸部の巨岩に対する信仰も南島地域だけに限らない。磐座という言葉があるように、各地の神社でも巨岩を聖なるものとすることが多いのである。巨岩に社殿の埋まつた隱岐の焼火神社や、『日本書紀』の「天磐盾」に比定される熊野の神倉神社のゴトビキ岩などである。そもそも海の神である宗像大社の聖域である沖ノ島には岩に関わる祭祀の跡が見られ、岩上祭祀の形態から五世紀後半の岩陰祭祀へと移行している報告<sup>(18)</sup>がなされている。

## 六 おわりに

ここまで、沖縄の開闢神話を出発点として、奄美から九州、本州までに関わる、海岸近くの岩山や海岸の巨岩、海中の小岩などこれらのシンボルが、古くは海に関わる人々によつて信仰されていたことを見てきた。海上から山や岩を見るという行動、それは海の民が持つ、生活をしていく上で必須の技術と深く結びついた行動の表れであると考える。自分たちの日常的にする行動、遠い海上から自分達の土地のシンボルでもある山を見るという視線の方向と、自分たちを守る神の来臨する方向を重ねることは当然のことだろう。高山の無い南島地域ではそれが海岸や海中に屹立する岩となる。海の民にとって、海の彼方から寄り来る神は、そのようにして山上にたどり着くと考えるのは自然なのではないだろうか。それは、自分たちの祖先がそのような方法でこの土地にやつてきた、という考え方も生み出すである。琉球開闢神話に見られた阿摩美久の降臨は天孫氏の末裔であると主張する国王の為には天から降らなければならなかつたであろうが、島に生きる人々の生活の中の信仰では、圧倒的に横方向の視線の流れが強かつたと考える。だからこそヤハラヅカサのように天から降りたはずのアマミキヨが海岸部に上陸した伝説も残つてゐるのだと考える。沖縄に関わる聖地と神来臨の場所を考えるに、『中山世鑑』の開闢神話のような「天上から地上へ降りる」図式と、久高島の五穀の壺やヤハラヅカサのアマミキヨ上陸の伝説のよう

「海上から浜へ寄り来る」図式という縦と横の二つだけではなく、「東御廻い」と「開闢神話」にかかる各聖地や辺戸御嶽、今帰仁コバウノ嶽などに見られたように、海上から目標にされていた「海上から山上へ寄り来る」という形式も古くからあつたと考える」ともできるのである。

## 注

- (1) 池田彌三郎「海神山神論の計劃」『船・舟・祭―松本信廣先生追悼論文集―』一九八二・九 六興出版
- (2) 『島尻郡誌』島尻郡教育部会員編 一九三七・七
- (3) 伊波普猷 東恩納寛惇 横山重 『琉球史料叢書 第一卷 琉球国由来記』一九七二・四 東京美術  
以下『琉球国由来記』を出典とする場合、『琉球国由来記』の卷一～卷十一が『琉球史料叢書 第一卷 琉球国由来記』、卷十二～卷二十一が『琉球史料叢書 第二卷 琉球国由来記』(伊波普猷 東恩納寛惇 横山重 一九七二・四 東京美術)に依るものとする。
- (4) 伊波普猷 東恩納寛惇 横山重 『琉球史料叢書 第五卷 中山世鑑』一九七二・四 東京美術
- (5) 今回、windowsの環境において、カシミール3Dというソフトウェアを利用した。地図と標高データを重ね合わせて位置を自在に動かし山の位置を同定したり、任意の日付と時刻の太陽の位置を確認したりできるものである。海上から聖地がどのように見えてくるかという確認にも利用できると考えるからである。辺戸の遠景も国土地理院による標高データの十メートルメッシュを利 用し、ほぼ写真と変わらない精度を確認できた。細かな岩の表現にまでは及ばないが、山の形状や位置を確認するには問題がない。
- (6) 琉球大学附属図書館の貴重資料デジタルアーカイブ伊波普猷文庫『聞得大君御殿並御城御規式之御次第』(<http://manwe.lib.u-ryukyu.ac.jp/d-archive/viewer?&cdi=00030330>)に依った。
- (7) 『なきじん研究 2009 Vol.16』沖縄県今帰仁村歴史文化センター

(8) 外間守善『おもろさうし 下』岩波文庫 二〇〇〇・十一  
以下『おもろさうし』を出典とする場合、『おもろさうし』の第一～第十二が外間守善『おもろさうし 上』(岩波文庫 二〇〇〇・三)、第十三～第二十二が外間守善『おもろさうし 下』に依るものとする。

(9) 外間守善 西郷信綱『おもろさうし』日本思想体系十八 一九七二・十二 岩波書店  
○○・三)、第十三～第二十二が外間守善『おもろさうし 下』に依るものとする。

(10) 折口信夫『折口信夫全集 2』一九九五・三 中央公論社

(11) 仲松弥秀『恩納村誌』一九八〇・三

(12) 仲松弥秀『神と村』伝統と現代社 一九七五・四

(13) 大林太良 他『海と列島文化 第五卷 隼人世界の島々』一九九〇・一〇

(14) 桜井満『奄美大和村の年中行事』—古典と民俗学叢書Ⅸ— 古典と民俗学の会 一九八五・十一 白帝社

(15) 『枕崎市史』枕崎市史編さん委員会 一九六九・九

(16) 『日本書紀①』小学館 新編日本古典文学全集1 一九九七・六 上巻 大国主神の国作りの条 頭注より

(17) 『古事記』小学館 新編日本古典文学全集2 一九九四・四 卷第二 神代下(第九段) 正文「吾田の長屋の笠狭の碆」頭注より

(18) 注 宗像 沖ノ島『本文』・『図版』・『史料』 第三次沖ノ島学術調査隊 一九七九・五